
世界を壊す咎人

神風大和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界を壊す咎人

【Nコード】

N9735R

【作者名】

神風大和

【あらすじ】

世界を創り上げた存在。

しかしその存在は後から侵入してきた神々との闘争に敗れ存在意義を奪われた。

やがて生き残った者たちは誓った。

もう二度とこんな悲劇が起こらないように『世界を壊そうと』

そんな組織に所属している末裔少女の物語

最近の若者の勢いという奴で書いてみた後悔はしていない。

プロローグ1世界を壊す者

初め世界を先に創り始めたのは我々だった。

我々は命を創り世界を創造した。

しかし、我々は後から侵入してきた神々との闘争に敗れ地位も名誉もその存在意義でさえも剥奪された。

本来ならば滅びるはずだったのだろう。

もしくは滅びた方が良かったのかもしれない。

だが生きていた。生きてしまったのだ。

そして生き残ってしまった者達は誓った。

『世界を壊そうと』

晴れ渡る青空

この雲ひとつない空はいつたい誰の心に当てはまるのだろうか。

「暑い………」

これからまだまだ暑くなり始めるであろう春の季節。

驚くほど白い肌と黒髪、それに伴うかのような美貌を持ち合わせた少女がうんざりしたように呟く。

いや、まだ暑いだけならば我慢できた。

しかし、ここ人多すぎじゃね？って思うほど人が多いのだ。

現在とある学園の入学式。

少女の目標はなるべく多く将来性のある魔法士を駆逐及び洗脳すること。

だからこの世界においてかなり優秀どころの魔法学園に入学してきたのだ。

結果的に正直言つて良い意味でも悪い意味でも期待外れだった。
良い意味では我々の組織と対等に戦える者がいないこと。悪い意味では暇つぶしがいなくなったこと。

これからここで四年間も過ごすとなるとかなり吐き気がする。
というかすでに吐き気を催してきた。

「この貧弱すぎる魔力に当たっているだけで気持ち悪くなるのだ。
(これももう帰って良いのかしら？まだ偉そうなハゲ頭髭面老人が喋っているけど……)」

かれこれ二時間ぐらい立ち続けている。

我慢して出てきた欠伸を噛み殺す。

「……以上！新入生諸君！十分に学生生活を満喫してくれ」

(やっと終わった……)

ようやく校長の挨拶が終わると次に学校説明を受ける。

これも事前に情報を仕入れていたので問題ない。

「我々の学校は自由を教訓にしている。生徒一人一人の自立ある行動に任せ……」

(また、長い……!!)

校長よりはマシだったがかもしれないが、これも長かった。

おそらくほとんどの生徒は話し半分にししか聞いていないだろう。

そのぐらいどうでも良い内容が盛りだくさんだった。

閑話休題

どうやら入学式は無事終わつたらしい。

らしいというのは少女が後半全て寝ていたからだ。

気がついたのはみんなが移動し始めてゴトゴトとした物音が頭に響いてきたから。

これから別の会場に移動して入学祝いのパーティー(立食)が開かれる。

というのもこの学園のほとんどが貴族によって構成されているからだ。

少女としては非常に面倒くさいのだが、表向き（といっても幼少の頃から移り住んでいるので違和感がない）侯爵家の出身となっているので出なければいけない。

少女の名前はセシル・エイフォンド・デイ・マスフィット

今までは病弱で表に出られない設定だったがそれだと色々不便だという事なので治療に成功し、社交性を身につけるためにこの学園へ入学した、という事になっている。

そして、一応ドレスに着替えたセシルは会場へと足を向ける。すれ違つ者は皆息をのむ。

しかし、悲しい事かな。彼女は一切気付かなかった。

彼女の頭の中にあるのはただ一つ「早く終われ」コレだけだった。会場に入るとすでに大半の生徒で埋め尽くされていた。

セシルは目立とうという気は全くないので潔く隅っこでジュースをちびちびと飲む。

アルコールが少々入っているのだろうか、徐々に体が火照ってきた。

「ミス、よろしければお名前をよろしいでしょうか？私の名はガリック・フォールドです」

（フォールド、確か伯爵家だったかな？）

「私の名はセシル・エイフォンド・デイ・マスフィットですわ、ミスタ、フォールド」

するとひとく驚いた様子で

「失礼ですが、あのマスフィット侯爵家のご令嬢様で？」

「ええ、そうですわ」

「そうですか。ではミス、マスフィット。よろしければ一緒に踊りませんか？」

貴公子らしく手を差し伸べるガリック。

本来のセシルならばこの手を取ることは一瞬無いのだろうが、アルコールが入った脳みそでは思考が及ばない。

まあ暇つぶしにはちょうどいいだろう、ぐらいにしか思っていない

かった。

よってその手を取って

「ええ、喜んで」

笑顔でそう答えてしまった。

ブローグ1世界を壊す者(後書き)

スランプ脱却のために書いてみたり

プロローグ2

ザワリ

ひと際大きいざわめきが会場を支配する。

皆が皆一組の男女に釘付けとなっていた。

一人は見目麗しい黒髪の絶世の美女、もう一人は金髪碧眼の美少年
注目を集めないという方が無理な話だ。

「おい、あの女性は誰だ？」

「あの男の子かっこいい……」

「男の方はフォールド伯爵家だ。女性の方は分からん」

「なんだ。じゃあ無名の貴族か、平民か？」

人それぞれ憶測が飛び交う中、男女は華麗に踊る。

洗礼された動き、見たもの全てを魅了する魅惑。

最早誰の目にも彼女が平民やそんじょそこの貴族には見えなかつた。

「………やっちゃった」

夜静けさが増すころ、少女は誰の目にも見えない所で一人頂垂れていた。

そもそも目立つ気などこればつちもなかった筈だった。

されど酒の勢いとはすごい物である。

人の意思を簡単に捻じ曲げてしまうのだから。

あのダンスが終わった後、多くの男性が言い寄ってきた。

この国の貴族は大体がプライドで構築されているので、ちよいと弄ったら顔を真っ赤にして去ってくれた。

まあ、早々に会場を後にしたので無視した男も多い。

「疲れた。寝よう」

肉体的な面ではなく精神的な面で。

言うがそうそうベットに潜り込み、心地よい眠りへと旅立とうとした時、プルルと何処からともなく音が鳴る。

その音には十分身に覚えがあつたが、疲れているので無視する。

プルルプルルブオーン

『あーあーあー、はろろくん。聞こえてますかあ〜?』

声は何処からともなく……否、机の上に置いてある紙から聞こえてくる。

しかし少女はその声に反応すること無く絶対出ない事を表現するかのように布団を深く被る。

『もしもし〜?もしもー……し!いるんでしょ〜?ねーねーねーねーねー……』

「うるさい!この、人が寝ようとしているときに!今何時だと思つてんのよー……!」

我慢出来なかつたセシルが顔を真っ赤にさせながら叫ぶ。

『おおう、いるんじゃないですかあ〜。いるんなら返事してくださいよう〜』

普段ならば癒し系で通る声音だが、眠るといふ彼女にとって数少ない至福の時を邪魔されたセシルには不愉快な音階を奏する間抜け声にしか聞こえない。

「あのね、今な・ん・じ・だと思ってるの?要点だけまとめて報告して」

『むう〜、せつかちですね。では、ご要望にお応えして。総統より連絡です。敵はいたか?だそうです』

……恐らく我々組織の敵足りえる存在はいたか、という意味だろう。

答えは

「否です。今の(・)と(・)は我々の敵は存在しません」

『そうですか。それは良い返事を聞けました。では引き続き警戒をよろしく願います。我らが復讐のために』

「ええ、我らの正義が為に」

それを最後に紙は音もなく燃え盛りやがて灰も残さず消え去った。
「さて、寝ましようか」

不機嫌を最大限に詰め込んだ声をきりにベッドに倒れ込むセシル。そのまま微動だにしなかったが微かに寝息が音を立てていた。

清々しい朝日が部屋に差し込む。

昨日はカーテンを閉め忘れていたので直に陽光が少女を包み込む。

「う・・・ん」

未だ覚醒しきれていないぼーとした面持ちの中、目をゴシゴシと擦りベツトを降りた後、洗面所に向かい顔を洗う。

水で顔を洗ってすっきりした後、自分で茶を入れて読書を嗜む。彼女のいつもどおりのスタイルだ。

侯爵家で過ごしていた時もこのスタイルだったし、学園に来たからと言って今までと違うといえば別段そうでもない。

ただ起きて食べて勉強するだけだから然程家にいた頃と変わらない。
い。

一つだけ違う所といえば侍従がないという所か。

それでも家にいた頃は趣味として自分で茶を入れていたし洗濯は流石に侍従に頼っていたがこの学園でも専用の侍従がやってくれるのでやはりあまり変わらない。

ちなみにこの学園は寮制となっており一人一部屋当てが割られている。

つまり隠密活動を主とするセシルにとってこれ以上ないくらい好

都合なのだ。

「あと15分で朝食ね。そろそろ移動しますか」

本を畳み棚へと戻すと一階にある食堂へと足を向ける。

やはりまだ朝早いようで人数が疎らだ。

途中すれ違ふ侍従達に頭を下げられるので、ニツコリと微笑む。

侍従達は一瞬驚いた表情をするが、すぐに微笑み返した来た。

驚くのも無理はないだろう。この国において平民とは道具以外の何物でもないのだから。ただ一方的に弱者と位置付けられた者達。ただ魔法が使えるか使えないかで差別され殺され侮辱され続けられる。というかこんな国が何千年も居続けたこと自体が不思議でならない。

(つと、いけない。平常心でいかなければ)

この国の事を考えているとそれだけで怒りがこみ上げてくるがいつか廃れる事は決定事項なので深く考えては駄目だろう。

見た感じかなり空いている食堂に着き空いた席へ座る前に、侍従の人に料理を頼んでから席へ着く。

食堂は貴族が利用するという事もあって煌びやかで豪華でそして広い。

煌びやかな点に至っては目に毒なほどである。

「あの、料理をお持ちいたしました」

十代半ば自分と同じくらいの年ごろと思われる侍従の子が初々しく頭を下げるとテーブルに料理を置く。

(なんか、危なっかしいわね。新しい子かしら?)

その子は料理を一通り置き終わるとまた初々しく頭を下げ去って行った。

終始危うさを残していた少女が不安になったが、自分には関係ないことか、と割り切り料理を食べ始める。

料理は見る限り肉、肉、肉である。

正直食べる側の健康などそっちのけで作っているに違いない。

そして多い。確かに料理はどれも一級品でとてもおいしいのばかりだが、肉ばかりなので基本飽きてしまう。

「はぁ………」

はつきり言っただけ食べきれない。

残りをどうしようかと思案していた時、背後に気配を感じる。

「おや、ミス・マスフィットではないですか。どうしたんですか、そんな朝から溜息吐いて」

後ろを振り帰ると昨日ダンスを踊ったガリック・フォールドの姿が。

「いえ、ミスタ・フォールド。ただ朝ごはんが食べきれなくて困ってたんです」

「ああ。そう言う事なら私が食べましょうか？」

「そう。ならお言葉に甘えさせていただきますわ」

そう言っただけ料理をガリックに渡すが、彼のテーブルにはすでに侍従によって運ばれてきた料理の数々が乗っておりこれにセシルの料理を混ぜるととんでもない量になってしまう。

「………たくさん食べるんですね。ミスタ・フォールドは」

「そうですね？ 私としてはこれが普通ですよ。それとミス・マスフィット私の名はガリックと御呼び下さい」

「そうですか。ならばそう呼ばせていただきますわ。それじゃあ私の名もセシルと御呼び下さい」

「了解しました。それとセシル。お身体の方は大丈夫なので？ 病弱とお聞きしましたが」

これは地なのか、本気で心配しているように問いかけるガリックにセシルはゆっくりと微笑み掛けた。

「はい。腕の良い治療魔法士に治療してもらった所とても元気にな

りましたわ」

「それは良かったですね。私にも病気で伏せる事がありましたらぜひ紹介して戴きたいものです」

「うふふ、そうならないことを祈りますわ」

この時二人は気付いていなかったが、傍目から見ると恋人にしか見えなかったという。

プロローグ2（後書き）

忙しすぎるぞワトソン君

ちょっとしか書けなかった。

次回はやっと教室、授業となります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9735r/>

世界を壊す咎人

2011年3月30日12時55分発行